

Q 6 : 竜巻発生時における児童生徒の安全確保の仕方を教えてほしい。

A : 竜巻は、発生予測が難しく竜巻注意報の精度にも限界があるとともに、その移動速度も速いことなどから、発生時には学校としての迅速な対応が求められる。教職員、児童生徒それぞれの冷静な判断が被害を最小限に抑える鍵となる。
以下に、竜巻発生時における児童生徒の安全確保の仕方について例を示す。

1 竜巻注意情報の把握と周知

- (1) 大気が不安定な状況等の気象情報が前日から出されている場合には、普段以上にテレビ、インターネット等により気象情報を把握するよう努める。
- (2) 竜巻注意情報等が発表された場合には、校内放送等で教職員及び児童生徒へ注意を促す。
- (3) 竜巻の予兆を感じる状況であれば、竜巻注意情報の有無にかかわらず、職員室内の警戒態勢をとり、空を注視するとともに、竜巻が発生した際の対応の準備をするなど、複数の職員で対応に当たる。

竜巻の予兆

- ・真っ黒い雲が近づき、周囲が急に暗くなる
- ・雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりする。
- ・ヒヤッとした冷たい風が吹き出す。
- ・大粒の雨や雹（ひょう）が降り出す。

竜巻が起きると

- ・「ゴー」という音が聞こえる。
- ・真っ黒い雲から漏斗（ろうと）状の雲が下がっている。
- ・トタン板や発泡スチロールなどのごみが宙を舞っている。

2 学校にいて竜巻が接近してきたとき

◎対応マニュアルを作成し、教職員の研修で共通理解を図るとともに、児童生徒の訓練を行う。その際、いろいろな場面を想定し、常にマニュアルどおりに行動するのではなく、臨機応変にどう行動するか児童生徒に考えさせることが重要である。

避難行動例	教室	・窓を閉め、カーテンを引く。 ・窓ガラスからできるだけ離れる。 ・身の回りにある物で頭と首を守る工夫をする。
	校舎内 (教室以外)	・風の通り道やガラスが飛んでくるのを避けられる場所に身を寄せる。 ・壁に近いところで避難姿勢をとる。
	屋外	・校舎など頑丈な建物に避難する。 ・物置やプレハブ（仮設建築物）などには避難しない。

3 登下校途中で竜巻が接近してきたとき

◎雷雨や強風時には登下校を控え、天候の回復を待つことが原則である。しかし、登下校の途中で竜巻に遭ってしまったら、児童生徒が自分で判断し避難行動をとれるよう指導しておく必要がある。

避難行動例	・屋根瓦など、飛ばされてくるものに注意する。 ・建物に避難できない場合は、くぼみなどに身をふせ、両腕で頭と首を守る。 ・電柱や太い樹木も倒壊する危険があるので近寄らない。 ・近くの頑丈な建物に避難する。 ・橋や陸橋の下には行かない。
-------	---

4 家において竜巻が接近してきたとき

◎児童生徒に対して、在宅時においても自分の身を自分で守ろうとする態度の育成に努める。

避難行動例	・気象情報や空模様注意到意する。 ・トイレや階段など、壁に囲まれた狭い場所で避難姿勢をとる。 ・窓から離れ、適切なものでガラスの破片などから身を守る。 ・2階から1階に降りて、丈夫な机やテーブルの下に入る。 ・竜巻が来る前に避難できるなら、家より頑丈な建物に避難する。
-------	--

竜巻が直撃した学校は大きな被害を受ける。児童生徒ばかりでなく教職員も怪我をすることが予想される。したがって、被害ゼロを目指しながら、様々な状況、最悪の状況を想定し、被害を最小限にとどめるための訓練を積むことが必要である。その際、児童生徒、教職員の訓練に加え、小・中学校においては保護者を含めた訓練や、「こども110番の家」を登下校中の避難場所として活用するなどの地域住民との協力体制づくりも大切である。

【参考資料】

・竜巻防災プログラム	H26.12 宇都宮気象台
・リーフレット「竜巻から身を守る～竜巻注意情報～」	H26.8 気象庁
・竜巻に対する学校の安全のために	H26.1 文科省
・「学校における防災関係指導資料―東日本大震災から学んだ大地震への備え及び竜巻への対応―」	H25.9 県教委
・学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開	H25.3 文科省